『天文・核融合連携準備研究会（第1回）』全体討論

Comment 1（田中雅臣／東北大）：要求する研究をしている方を探すのが難しい。何かマッチングをするシステムを作っていないか、または作る予定は。

長壁：研究所を訪問する機会を作っているはず。

坂本：この研究会を今後の共同研究の種を発見し、ネットワーク拡大に生かしてもらいたい。

伊藤：サイトビジットの前には、若手が200名くらい集まる研究会があった。口頭発表よりもポスター発表が共同研究の機会創出に繋がった。

仲田：次回以降は、参加者が個々に説明し合える工夫も考えたい。

村上：Q&Aのサイトに発表者のコンタクトアドレスも明記しては。今後の繋がりを育てられるのではないかと思う。

仲田：技術募集の掲示板のようなものを作成するのも良いかと思う。

Comment 2（井口聖／NAOJ）：草の根から、共同研究を作っていく土壌が形成されてきたので、逆に組織的なコーディネートが求められるようになってきたのではないかと思う。このような交流を続ける事で、組織を動かす力になるのではないかと思う。

Comment 3（岡村昇一／NIFS）：機構といての活動に関して。NIFS－NAOJの連携など模索している。機構の中で共同研究模索し、無理やり若い人を集めたりもしている。NINS全体で上から押し付けるようにマッチングしてもこれほど活発に進まないと思う。NIFS-NAOJは物理に共通点も多いため、良い形式になったのではないか。このような研究会は尻すぼみになる事が多いので、今後の運営をどのようにするか、考えると良い。

Comment 4（伊藤篤史／NIFS）：分野間連携を多数行ってきた。どちらかが主役になるためFirst-author問題が出てくる。両方が論文をFirst-authorとして書けるような共同研究を構築できると良いと思う。良い具体例があれば、是非そのマネージメント方法を知りたい。

仲田：文化の違いも含めて議論していけると良いと思う。興味はあるけれども、本業に忙しいという方も多い。連携研究は、双方に余裕が無いと成立しないと思う。

Comment 5（岡村昇一／NIFS）：60名以上の参加者がいる。オンライン開催のため、気楽に参加できるという点が参加者が多くなった理由の一つであると思う。対面の会議とオンライン会議をうまく組み合わせて運営してもらいたい。

Comment 6（村上泉／NIFS）：ひのでとLHDの連携研究は始めて16年になりますが、関連する論文を多数出してきました。CoBIT開発やCoBITでの実験、LHD実験、原子データ評価など、様々な角度から多数の鉄イオンに対して取り組んできましたので、関わった研究者も学生も、それぞれ第1著者となる論文を出してくることができました。論文の第1著者問題は、取り組み方次第かと思います。

Comment 7（仲田資季／NIFS）：伊藤さんの仰るポイントも実際に起こり得ることとして理解できます。その他にも、こういった連携研究のなかには遊び心をもって新しい種を探す類のものもあるかと思います。その時、双方の本業研究やその他の仕事に圧迫されて余裕がない状態ではなかなかうまく回らないケースもあると思うので(強い興味はあるが忙しすぎて参加できないと断られたケースもあり)、連携を良くすることと本業研究の取り組み方(連携研究に対する評価も含めて)を良くすることは無関係でない気がします。今日はサイエンスや技術開発に関する話題が本題であったが、こういった連携コーディネーションや進め方のノウハウみたいな観点の情報共有・議論があってもよいかと感じました。